



市民談話室



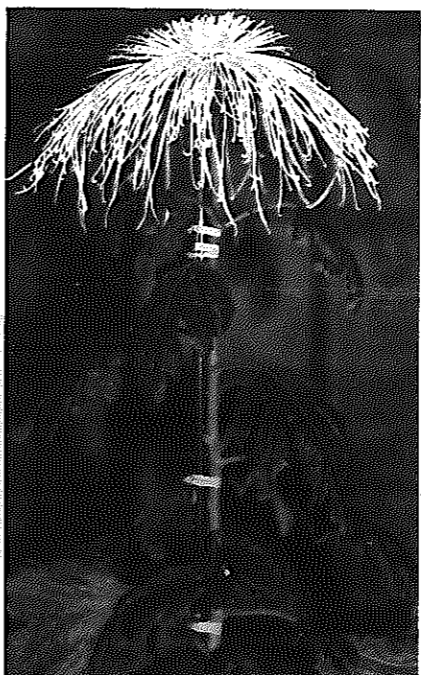
菊作り
楽しい仲間たちとの語り
丸山勝栄さん（白井・四十九歳・会社員）

菊作りといっても、私の場合には観賞用の大菊です。最初十鉢ほど作ったのがきっかけで、月日のたつのは早いもので、もう五年になりました。一般に、菊作りなどというと定年になった人や、暇な人たちがするものだと思うのですが、私は決してそうは思いません。やる人、やらない人の違いで、やればだれでもできると思っています。手間がかかり、めんどうだ、と決めつけているからです。四月に挿し芽をし、文化の日の出品を目標に作るわけですが、それまでの間、朝夕水やりや予



八月の思い出
終戦と私
丸山武春さん（下鷺ノ木・六十四歳・無職）

八月は思い出の多い月です。四十三年前の八月、私は旧海軍の機関兵でした。日本軍は形勢不利となって本土決戦を決め、私たちは三十三突撃隊に編入させられました。探照隊として、発電機と照明器具一式を持って、長崎半島の南端、樺島という人口四百人ぐらいの小島でしたが、そこで機器の据え付け作業に専念しました。八月六日、広島に大型爆弾が落とされました。（その当時、



菊作りといっても、私の場合には観賞用の大菊です。最初十鉢ほど作ったのがきっかけで、月日のたつのは早いもので、もう五年になりました。一般に、菊作りなどというと定年になった人や、暇な人たちがするものだと思うのですが、私は決してそうは思いません。やる人、やらない人の違いで、やればだれでもできると思っています。手間がかかり、めんどうだ、と決めつけているからです。四月に挿し芽をし、文化の日の出品を目標に作るわけですが、それまでの間、朝夕水やりや予



お盆にちなみ
浄土真宗お経会創設の思い出
田村平造さん（十五間・七十八歳・無職）

昭和五年二月、当村の信仰家で当時六十歳くらいだった、故伊藤与一郎さんの発起で、浄土真宗のお経会を作ろうという呼びかけがありました。お経は根岸村の林正寺の金左工門（略称）僧から教えていただき、会員の家を交替に会場として、毎晩手厚い指導をいただきました。当時私は二十一歳で、会員のなかでいちばん若かったのですが、あれから早くも五十七年の

市民談話室 お気軽に 便利をください

市民談話室のコーナーは、皆さんが日ごろ考えていること、ふと思っただけのことを声にするコーナー。どんなお便りをお寄せください。何を書いたらいいかわからないとおっしゃる人は、次のテーマを書いてみてはいかがでしょうか。

十一月「旅行」

旅先での楽しい思い出、バスの旅、列車の旅、人との触れ合い、名物やみやげ品など、旅行にまつわる皆さんのお便りをお待ちします。

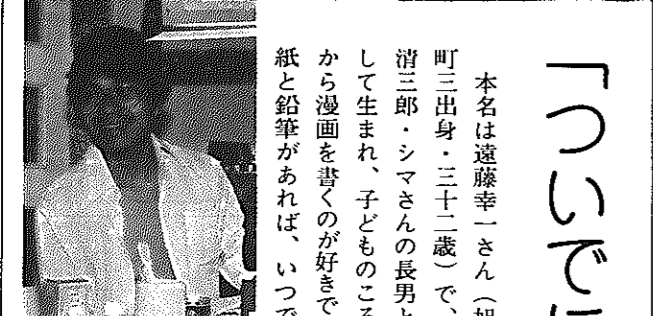
十二月「この一年」

月並みですが、一つのおくりとして一年を振り返ってみたいと思います。心に残った出来事や、事件、人との出会いなどについてどうぞ。また、市政や広報へのきいたんのないご意見もお寄せください。原稿の長さは400字から500字程度とします。あて先は〒950-12 白根市大字白根1235 白根市役所 企画調整課 広報広聴係です。

市民文芸

川柳
愛称のまま呼び合うクラス会
田中 成子
友情が溢れて酔えるコップ酒
田村 恒夫
信用と言う看板を妻と上げ
長井 徳市
剣豪が坐禅で悟る無刀取り
中村 尚治
針運ぶリズム確かな母の指
西条 ムラ
若返り法にしている美女の酌
早川 英男
未来の灯燃やし続ける夫婦独楽
山岡 フミ
追伸の終りに少し書く本音
吉川 彰
衰えた腰につけてる万歩計
米野 光雄
鮮明に浮き出るエリート未来
今井 七郎
母チャンの内緒話に膝が寄る
織田 セツ
凡夫婦完結編はまだ書けず
後藤マサノ
カーテンを替えて古家も若返る
佐藤トミノ
初物を水子地蔵に食わせたい
佐藤 ヨキ
恍惚の帽子が好きなき赤トンボ
高橋祐四雄

養農の爪跡田んぼが多すぎる
竹石 甚五
俳句
大松の根元よりそい萩咲けり
波辺 勤
野仏の膝の上にも稲の花
玉木 長吉
短歌
一昼夜東風吹きて朝焼の
西の雲は高く流るる
中村 京
老人の運動会に吾れこそは
汗を流して必勝めぞす
長谷川久二
半世紀苦業眺て経し大樽
太枝張りて吾が屋敷ふ
木村 キミ



「いすゞ」と「ちんかんの」の漫画家 遠藤幸一さん

本名は遠藤幸一さん（旭町三出身・三十二歳）で、消三郎・シマさんの長男として生まれ、子どものころから漫画を書くのが好きで、紙と鉛筆があれば、いつでも漫画を書いています。昭和五十年に白根高校を卒業後、静岡県の日本楽器に入社しました。漫画家志望の夢が捨て切れず、五年九か月で退社。独学で漫画の勉強を始めました。書いた作品は出版社へ持ち込んだり、投稿したりしましたが、半年後、デビュー作「アノアノとんがらし」が認められて、漫画家としてのスタートを切りました。

遠藤さんは「昔は漫画を書くのはおもしろかったが、今は苦しいという感じですが。今後は、だけれども読まれる作品を書きたい」と話します。本年五月に東京から黒埼町に引っ越してきた当時、近くの子どもたちからサイン攻めに遭ったという遠藤さん。午後二時から翌朝までの夜中に仕事をするといいいます。健康に気をつけて、ますます活躍することを期待しています。